

2019.12.12 (報告)資料3

# 2019年度 JFA社会貢献委員会報告

公益財団法人 日本サッカー協会

社会貢献委員会

2019年12月12日  
理事会資料

**JFA**



# 概要

- 委員会の種類： 専門委員会（各種委員会運営規則第3条）
- 設置： 2016年3月
- 所管事項： 社会貢献に関する事項
- 委員長： **日比野 克彦**（JFA参与／国立大学法人東京藝術大学美術学部長）
- 委員：  
**村松 邦子**（株式会社ウェルネス・システム研究所）  
**高橋 陽子**（公益社団法人日本フィランソロピー協会）  
**赤羽 真紀子**（CSRアジア東京事務所）  
**黒田 かをり**（一般財団法人CSOネットワーク）

※黒田委員は、内閣府公益認定等委員会の常勤委員に就任したことから、9月末をもって辞任。

- 開催日程：  
(過去2年間)  
2018年6月8日  
2018年10月17日  
2019年1月30日  
2019年6月18日
- 関連活動：  
東京藝術大学との連携  
国連グローバル・コンパクト活動  
寄付月間  
子供の未来応援国民運動  
子ども宅食プロジェクト  
社会的インパクト評価 ほか



# サッカーを通じた社会の発展への貢献（SDGsへの対応）



社会貢献委員会では2017年度、JFA職員に対してSDGsとJFAの各事業についてのアンケート調査を実施しました。その結果、JFAのあらゆる事業が様々な領域でSDGsのゴールとつながっていることがわかりました。

これを受けて、2018年度から以下の情報を公式ウェブサイト上で発信しています。

詳細情報

[https://www.jfa.jp/social\\_action\\_programme/football\\_contribution/](https://www.jfa.jp/social_action_programme/football_contribution/)

公益財団法人日本サッカー協会（JFA）は、サッカー競技を統括する唯一の団体としての社会的責任をふまえ、「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する。」という理念のもと、サッカーを通じた様々な社会貢献活動を行っています。JFAは、2009年に国連グローバル・コンパクトへスポーツ統括団体として世界で初めて登録されました。国連サミットで採択された「持続可能な発展のための2030アジェンダ」で表明されている「持続可能な開発目標（SDGs）」の達成に、スポーツを通じて貢献していきたいと考えています。

JFAは、スポーツが持続可能な発展につながるツールであることを認識し、理念やビジョンに基づく取り組みの一つひとつが、SDGsに掲げられたゴールの達成に大きく寄与できると考えています。その一例をご紹介します。

## 持続可能な発展のための2030アジェンダ

**宣言36** スポーツも持続可能な発展にとって重要です。我々は、寛容やリスペクトを促進し、女性や若者のエンパワーメントや個人、コミュニティに寄与するスポーツの貢献が、健康や教育、社会的包摂の目標と同様に、発展と平和の具現化に寄与すると認識しています。

### 多様性を大切にする

スポーツは、年齢、性別、人種、国籍、障がいの有無などに関係なく、だれもが、いつでも、どこでも楽しむことができ、ダイバーシティ&インクルージョン（多様性と包摂）を促進することができます。JFAは、これまでも様々なカテゴリーの競技会を開催し、スポーツのあらゆる現場に女性が関わり、ポテンシャルを発揮できる社会の実現を目指す「なでしこビジョン」を制定し、目標を掲げて活動を行っています。

また、2014年5月には「JFAグラスルーツ宣言」を行い、サッカーをもっとみんなのものにしていく活動を行っています。



対応するSDGsのゴール



### 次世代の若者を育てる

スポーツは、世界中の若者を惹きつけ、一人ひとりの心身の健全な発達に役立ちます。

JFAは、2003年から「JFAキッズプログラム」をスタートさせ、47都道府県サッカー協会とともにそれぞれの地域の実情に合わせ、子どもたちの成長に適した「JFAキッズサッカーフェスティバル」や「巡回指導」などの様々な活動を展開しています。また、リスペクト・フェアプレー、夢を持つことの大切さを学校の教壇でアスリートが伝える「JFAこころのプロジェクト」は、日本全国と海外で年間約2,000回行われています。



対応するSDGsのゴール



### 住みやすいまちづくりにつなげる

スポーツは、環境保全や犯罪防止、災害からの素早い回復や子どもの貧困対策といった、様々な課題解決のツールとして期待され、活用されています。

「JFAグリーンプロジェクト」は、子どもたちの外遊びや地域コミュニティ作りに役立つ芝生のグラウンドを増やす取り組みです。東日本大震災や熊本地震に関して、サッカーファミリーの活動が早期に再開し、地域の日も早い復興に役立つ活動を、国内外の多くの方々からの支援を受けながら実施しています。



対応するSDGsのゴール



# AFC ドリームアジアアワード受賞

JFAは、サッカーを通じた社会貢献活動を表彰するAFCドリームアジアアワード2019において、インスパイア加盟協会部門の金賞を受賞。10月30日にクアラルンプール（マレーシア）のAFCハウスで開催されたAFC ドリームアジアアワード2019において表彰された。なお、NGO部門では日本障がい者サッカー連盟が同時に受賞した。



## 授賞理由（AFC公式ウェブサイトより）：

「国連グローバル・コンパクト」に登録された世界で最初のスポーツ統括団体として、JFAは三つの柱—すべての人のためのスポーツであること、青少年の育成を通じてその可能性を最大化すること、そして人々のより良い生活と地域社会を構築すること—を軸に社会貢献に取り組んでいる。ASEAN諸国とのサッカー交流プロジェクトやJFAこころのプロジェクト、そして「DREAM福島アクションプラン」での被災地への継続的な復興支援等は地域社会に寄り添ったもので、JFAが行っている活動のごく一部に過ぎない。サッカーを通じたこれらの魅力的な活動によって、JFAはアジア全体の加盟協会に真のインスピレーションを与えている。



# 東京藝術大学との連携

- 2018年4月9日に国立大学東京藝術大学と「芸術およびスポーツを通じた社会貢献活動の推進に関する連携協定」を締結。
- 2018年度から同大学の特別講座「DOOR（Diversity on the Arts Project）」において、JFAの社会貢献活動を映像化する授業を開講。
- 2年目となる2019年度は、同特別講座の「ハンディムービープラクティス」の科目において、受講生一人ひとりがスマートフォンで動画を撮影し、タブレットで編集するといった形で映像製作に臨んだ。国連「持続可能な開発目標（SDGs）」に沿ってJFAの復興支援活動、シニアサッカー、女子サッカー、グラスルーツ推進活動などのテーマを取り上げたものもあった。

## 日比野学部長コメント（2019年度最終講義を終えて）：

この授業を通じてサッカーに初めて接した受講生も多く、現場に行き撮影し、サッカーを通じて被写体やまわりの人とコミュニケーションを図り、協力をあおいだりできたことが彼らにとって大きな経験となりました。サッカーはボールさえあれば、“誰もが・いつでも・どこでも”できるスポーツです。スポーツにはルールがあり、共通のルールがあるからこそ国を越え、民族を越え皆で楽しみ、表現することができるものなのだと思います。





# 国連グローバル・コンパクト活動

- 「国連グローバル・コンパクト」は、グローバル経済の進展により生じた様々な社会課題に対応するために創設された、国連機関・民間企業・非営利団体等が参画するプラットフォーム。
- 国連「持続可能な開発目標（SDGs）」の推進につながることから、多くの企業・団体がこれに賛同しており、日本におけるローカルネットワークである「グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン」には、2019年11月現在、342の企業・団体が加盟している。
- JFAは、この活動がJFAの理念に合致することから、2009年7月7日にスポーツ競技団体として世界で初めてこれに署名し、同ネットワークに加盟した。また、2016年12月には、一般財団法人全日本大学サッカー連盟も加盟した。
- 会員団体同士の勉強会（「SDGs分科会」「CSV分科会」「レポート研究分科会」）に職員が参加し、持続可能な社会作りに向けて情報交換を行っている。また、「組織拡大委員会」という同団体の事業企画検討グループにも職員を派遣している。



## 国連「開発と平和のためのスポーツ国際デー」（4月6日）

### 田嶋会長ビデオメッセージ

私たち日本サッカー協会は、「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する」と謳っています。

まさに、このSDGsが掲げる17のゴールと私たちのゴールは同じです。

特に子どもたちが、安心して安全に住める社会を創らなければ、サッカーをすることはできません。私たちは、サッカーを通じてSDGsとともに社会の問題の解決に協力していきたいと思えます。将来、子どもたちが安心して夢を持ち、のびのびと生活する素晴らしい地球の未来を創ることができるよう、私たちサッカー界も協力します。



# 寄付月間



- 寄付月間（Giving December）は、寄付を通じたよりよい社会づくりを願う様々な人々が毎年12月、全国一斉に行っているキャンペーン。NPO、大学、企業、行政などあらゆる団体がこのキャンペーンに賛同し、それぞれの団体ごとに公式認定企画と呼ばれる独自の取り組みを行っている。
- JFAも、2016年からこの寄付月間の「賛同パートナー」として参画し、スタジアムでの啓発活動などを通じて、サッカーファミリーによる寄付文化醸成に貢献している。
- 一般財団法人全日本大学サッカー連盟は、ゴール数に応じた寄付を行い、悪意のある警告や退場によって減額する「ONE GOAL ONE COIN」などの取り組みを行っている。一般社団法人日本障がい者サッカー連盟は、リフティングの回数に応じて楽しく行う「キフティングチャレンジ」を開発し、主催事業の会場等で展開している。
- 今年は、寄付月間のキックオフイベントを12月1日にJFAハウスで開催し、様々な寄付月間の公式認定企画等をその場で体験することができる「寄付の文化祭」のような場を企画。全国の賛同パートナー団体の関係者のみならず、寄付について関心のある親子連れなど約120人が参加した。
- また、今年も天皇杯全日本サッカー選手権の会場等で、寄付月間のプロモーション映像を上映する予定。

## 内閣府 子どもの貧困対策担当参事官補佐 平田菜摘さん（キフフェス2019に参加して）

会場の方々の、楽しみながら気軽に参加する姿が印象的でした。寄付を特別なことではなく、習慣としてとらえる社会に向けて、こうしたイベントを通じて、これからも貢献したいと思います。また、これを機に皆様に『子供の貧困』という課題にも目を向けていただけたら嬉しいです。





# 子供の未来応援国民運動



- JFAはこれまでも、サッカーを統括する唯一の団体としての社会的責任を踏まえ、JFAの理念・ビジョンに基づき、子供の未来を応援する様々な取り組みを積極的に行ってきた。
- 特に、「貧困」や「健康」などの社会課題は、**国連の持続可能な開発目標（SDGs）**にも掲げられている解決すべき世界の目標であるが、スポーツには特に若者を結びつけ、人々に勇気や希望や感動を与え、幸せなれる環境を作る力がある。
- 2014年5月に行った「**JFAグラスルーツ宣言**」は、年齢、性別、障がいの有無、経済状況など、一人ひとりの置かれている境遇に関係なく、だれもが、いつでも、どこでも、安全に安心してサッカーを楽しめる社会を目指している。また、2019年5月には「**サッカーファミリー安全保護宣言**」を行い、この取り組みをさらに加速させている。
- 今後も日本全国のサッカーファミリーやパートナーとともに、子供たちがスポーツを身近に感じ、夢を持てる様々な取り組みを進めていく。

## (1) 学校でも家庭でもない居場所づくり

- キッズプログラムの推進（指導者養成、フェスティバル、巡回指導等、約50万人）
- JFAグラスルーツ推進・賛同パートナー制度（全国約200団体）

## (2) 子供たちに勇気や希望や感動を与える取り組み

- JFA・キリンビッグスマイルフィールド（サッカーを通じた復興支援活動）
- JFAユースプログラム（日本代表戦の試合会場で実施）
- JFAこころのプロジェクト「夢の教室」（約2,000回）
- 文京区子ども宅食プロジェクトへの協力



内閣府牧野利香参事官（左）と田嶋会長

JFAは、「子供の未来応援国民運動」に賛同し、サッカーを通じた取り組みをより一層進めていくこととし、5月29日にキックオフセレモニーを行った。セレモニーには、内閣府で子供の貧困対策を担当する牧野利香参事官と田嶋幸三JFA会長が出席。





# 子ども宅食プロジェクト



文京区役所での活動報告会の様子

- 日本の子どもの、7人に1人が、「貧困状態」にあると言われている。そんな環境下に置かれた子ども達は、「友達と遊びに行かない」「部活には入らない」「大学には行けない」と、少しずつ、夢を諦めていくのかもしれない。
- 保護者もまた、「子どもの夢を、応援できなかった」と自分を責めるのかもしれない。
- このような現実を受け止め、日本サッカー協会（JFA）の拠点がある文京区では、「子ども宅食プロジェクト」を2017年度からスタート。
- こども宅食では、文京区がNPO団体等と協力し、区内に住む生活の厳しい子どもの家に、定期的に食品を届けている。ただし、食品を届けることだけが目的ではなく、食品配達をきっかけに気軽に相談ができる関係をつくり、孤立しがちな家庭に必要なサービスにつないでいくことを目的としている。
- JFAも、子どもたちの未来と夢を応援できるよう、同プロジェクト参加による国内における貧困問題の啓発に加え、年数回支援対象の家庭向けに日本代表戦来場者グッズの提供を実施。2019年は、初めて日本サッカーミュージアムへのご招待を実施した。

# 社会的インパクト評価

事業の社会的な成果を可視化し、学びや改善につなげるための取り組み。

背景：国際的に、非営利組織への資金提供者が社会的な成果を求める傾向が高まっており、日本においても少子高齢化や人口減少などさまざまな社会課題が多様化・複雑化する中で、行政だけに頼らないさまざまな取り組みを広げることが求められている。

JFAの取り組み：2014年に「JFAグラスルーツ宣言」を発表し、誰もが、いつでも、どこでも、サッカーを楽しめるよう取り組んでいるが、実際に現場で活動する方々がより評価され、さまざまな団体からの理解や支援を得やすくなる方法の一つとして、この「社会的インパクト評価」についての調査研究を行ってきた。その一環として、昨年より社会的インパクト・マネジメント・イニシアチブ共同事務局が取り組む評価ツールセットのスポーツ版の策定に協力し、2019年7月に公開。



第2期スポーツ基本計画をもとに、ロジックモデルを作成。

## 社会的インパクト評価スポーツ版ツールセットの作成に協力した 社会貢献委員会 村松邦子 委員 (Jリーグ参与/株式会社ウェルネス・システム研究所)

近年、スポーツのもつ社会公益性の観点から、地方創生や社会課題解決のツールとしてのスポーツの役割に期待が寄せられています。全国各地でさまざまなスポーツ団体が地域の課題に向き合い、地域貢献活動を展開していますが、多様なステークホルダーと信頼関係を築きよりよい社会を共創していくためにはスポーツが生み出す社会的インパクトを示していく必要があります。そこで今回、社会的インパクト評価の手法を使ってスポーツの社会的価値の可視化を試みました。本評価ツールが、スポーツに関わる多くの人々がスポーツの多様な価値に気づき、可視化することを試みるきっかけになれば幸いです。

詳細情報

<http://www.jfa.jp/news/00022156/>

# 情報発信

日本サッカー協会（JFA）は、サッカー競技を統括する団体としての社会的責任を踏まえ、「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する。」という理念を掲げている。社会貢献委員会はこの理念にある「社会の発展への貢献」について考えるJFAの専門委員会の一つで、組織の社会的責任（CSR）の分野に詳しい5人の有識者によって構成されている。この社会貢献委員会の活動をサッカーファミリーの皆さんにお知らせするため、2019年度はJFA公式サイトを通じて、積極的に情報発信を行った。

掲載日	タイトル	URL
7月16日	CSRリレーコラム第1回「JapaFunCupとマッチフラッグ」 ～社会貢献委員会 日比野克彦委員長～	<a href="https://www.jfa.jp/news/00022039/">https://www.jfa.jp/news/00022039/</a>
8月15日	CSRリレーコラム第2回「サッカーとSDGs<誰一人取り残されない未来を目指そう>」 ～社会貢献委員会 黒田委員～	<a href="https://www.jfa.jp/news/00022369/">https://www.jfa.jp/news/00022369/</a>
9月17日	CSRリレーコラム第3回「Jリーグと社会連携」 ～社会貢献委員会 村松委員～	<a href="https://www.jfa.jp/news/00022741/">https://www.jfa.jp/news/00022741/</a>
10月16日	CSRリレーコラム第4回「『社会貢献活動』を伝えること」 ～社会貢献委員会 赤羽委員～	<a href="https://www.jfa.jp/news/00023132/">https://www.jfa.jp/news/00023132/</a>
11月15日	CSRリレーコラム第5回「『誕生日寄付』からみる寄付の醍醐味」 ～社会貢献委員会 高橋委員～	<a href="https://www.jfa.jp/news/00023524/">https://www.jfa.jp/news/00023524/</a>
6月28日	フットボールにできること Vol.1 ～サッカーを通じた社会貢献～	<a href="https://www.jfa.jp/news/00021807/">https://www.jfa.jp/news/00021807/</a>
7月26日	社会貢献委員会開催レポート	<a href="https://www.jfa.jp/news/00022121/">https://www.jfa.jp/news/00022121/</a>



# CSRリレーコラム第1回「JapaFunCupとマッチフラッグ」 ～社会貢献委員会 日比野克彦委員長～



©JFA

# CSRリレーコラム第1回「JapaFunCupとマッチフラッグ」 ～社会貢献委員会 日比野克彦委員長～

マッチフラッグとは試合をする二つのチームを応援するひとつの旗を意味します。互いの国、チームのことを思いながら旗を作る、相手がいるから試合ができる、共にサッカーを愛する人が集まる日のことを想像する。サッカーがあるから出会うことができる。スポーツの試合を文化交流の場として捉えて展開するのがマッチフラッグです。

6月22日に福島県Jヴィレッジにて、国際交流基金アジアセンターとの共催で、東南アジア11カ国から編成された選抜チーム「ASIAN ELEVEN U-18東南アジア選抜」とU-18東北選抜のJapaFunCupの試合が行われ、マッチフラッグがバックスタンドを埋め尽くしました。東京藝術大学や代々木公園で開催されたラオスフェスティバル2019で、学生や一般参加者と共に、11カ国のそれぞれのナショナルフラッグと日の丸の二つを一枚のフラッグにデザインし、縦110センチ幅180センチの旗を40枚制作しました。

当日はマッチフラッグの制作に参加した90名が上野の東京藝大前に集合して、貸切バスでJヴィレッジに集まり、自らが製作したマッチフラッグを持ってスタンドで応援をしました。この日が、サッカー観戦が初めてという人も多く、最初は旗を振るタイミングも応援もまちまちでした。次第に「東北！！アジアン！！東北！！アジアン！！」という掛け声が生まれ、みんなの気持ちが手から旗に伝わり、旗が波打ち、ピッチ上の選手たちへとサポーターの気持ちが伝わっていきました。試合は0-0で90分で決着がつかずPK戦となり、5-4でASIAN ELEVENが制し、JapaFunCupの優勝カップを受け取りました。アジアンの選手たちはセレモニー後にバックスタンドに挨拶しに来てくれて、自分たちの国の旗を見つけては手を振ってくれました。そして、ここから今回のマッチフラッグが、最高に盛り上がるシーンが始まるとは、私も思ってもいませんでした。マッチフラッグ製作者のみなさんが、なんと選手たちにそれを手渡し、プレゼントしたのです。

選手たちも「もらっていいの？」と最初は少し驚いていましたが、自国と日本の旗がデザインされたマッチフラッグを持って、勝者の舞がごとく喜びを爆発させてくれました。整備された緑のピッチ上に様々な肌の色の選手たちが持つ色鮮やかなマッチフラッグは一層美しく、熱く、誇り高く、とても輝いて見えました。その姿をみて思わず目を潤ませるマッチフラッグ製作者もいました。故郷の国を離れて日本でアジアの仲間と会い、チームをつくり、マッチフラッグの声援を受けながら試合をし、勝利し、そして試合後サポーターと声を交わし、自国と日本のマッチフラッグを纏う！全てサッカーがあるからこそ成し得たことです。選手たちは自国に戻り、このマッチフラッグを見たときに、日本のこと福島のことJヴィレッジのこと、サポーターのことを思い出してくれる瞬間がきっとあるでしょう。マッチフラッグは人と人、国と国、あの時と今を繋いでくれる旗なのです。





# CSRリレーコラム第2回「サッカーとSDGs <誰一人取り残されない未来を目指そう>」～社会貢献委員会 黒田委員～





# CSRリレーコラム第2回「サッカーとSDGs <誰一人取り残されない未来を目指そう>」～社会貢献委員会 黒田委員～

## スポーツを通じたSDGs達成への貢献

「スポーツを通じて持続可能な未来づくりに貢献する」という機運が世界中で高まっています。開催まで1年を切った東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会では、「大会を通じて、世界共通の課題である国連の『持続可能な開発目標（SDGs）』に貢献する」ことを明言しています。

17の目標と169のターゲットから成るSDGsは、貧困のない、持続可能な世界を次世代に受け継いでいくことを目指す世界規模の共通目標です。SDGsは、「誰一人取り残さない」という理念を掲げており、社会的包摂やジェンダー平等を含む人権尊重がベースになっています。SDGsの国連文書の第37節には、「スポーツが持続可能な発展における鍵となる」と書かれています。スポーツは、平和への貢献とともに、健康、教育、社会的包摂の目標の達成や、女性、若者、個人やコミュニティの能力強化に寄与することができるからです。



## サッカーとSDGs

サッカーは、スポーツの中でも、持続可能性（サステナビリティ）や人権尊重への取り組みにいち早く取り組んできました。国際サッカー連盟（FIFA）のサムラ事務総長は、SDGs達成に向けたサッカーの貢献や同連盟のコミットメントを明言しています。FIFAは、これまでも競技中の差別的な行為の撤廃や人権侵害の防止などに取り組んできました。2018年のFIFAワールドカップ・ロシア大会と2022年のカタール大会に向けた建設労働者の人権侵害などが大きく報道されると、FIFAは人権方針を策定し、大会会場の建設労働者の権利保護や、競技中の選手への人権侵害や差別の予防などを盛り込みました。さらに2017年11月には、初の人権報告書を発表しました。

今年の6月初旬、パリで開催された同連盟の理事会において、人種差別に対する「ゼロ・トレランス（非寛容）」を懲戒規程に反映させることが決まりました。JFAも今年の5月に、「JFAサッカーファミリー安全保護宣言」を発表。サッカーにおける暴力・暴言を根絶する「ゼロ・トレランスの実現」や「子どもたちをハラスメントから守る」といった取り組みを推進しています。

サッカーのクラブチームも、それぞれ「誰一人取り残さない」SDGsの達成にさまざまな貢献をしています。FCバルセロナ財団は学校へのいじめ問題をなくす取り組みを行っていますし、レアル・マドリッド財団は教育と文化の活動や社会福祉事業を実施しています。チェルシー・フットボール・クラブは、英国の学校で、平等と差別の気づきと、友情とチームワークの価値を考える教育プログラムを実施しています。

# CSRリレーコラム第2回「サッカーとSDGs <誰一人取り残されない未来を目指そう>」～社会貢献委員会 黒田委員～

## 日本の動き

日本でも、日本サッカー協会（JFA）やJリーグのクラブチームがSDGsへの貢献を表明しています。

日本障がい者サッカー連盟（JIFF）は、日本サッカー協会と協働して、日本ブラインド・サッカー協会など7つの加盟団体をサポートしています。理念は、「広くサッカーを通じて、障がいの有無に関わらず、誰もがスポーツの価値を享受し、一人ひとりの個性が尊重される活力ある共生社会の創造に貢献する」です。これは、「誰一人取り残さない」というSDGsの理念と軌を一にするものだと思います。

浦和レッズは今年7月にSDGsへの参加を表明しました。Jリーグは、全国で展開する社会連携事業をSDGsで整理し直しています。また、2014年から差別をなくすためのアクションプログラム「ゼロ・トランス」を実施してきました。こういう活動が、東京2020大会をはじめ、他のスポーツ競技に広がっていくことを願っています。

## 最後に：誰一人取り残されない未来を作るために

世界中の多くの人たちを魅了するサッカーには、計り知れない力があります。国境や人種を超えて、ともにサッカーを楽しみながら、社会課題を考え、解決に向けて行動する人たちの輪が広がることで、差別のない、誰もが包摂される、持続可能な未来が実現していくことを強く期待しています。





# CSRリレーコラム第3回「Jリーグと社会連携」 ～社会貢献委員会 村松委員～





# CSRリレーコラム第3回「Jリーグと社会連携」 ～社会貢献委員会 村松委員～

## 地域と共に

Jリーグは26年前の発足当時から「地域密着」をポリシーに掲げ、地域社会と共に存在してきました。「Jリーグ規約」には、「Jクラブはホームタウンと定めた地域で、その地域社会と一体となったクラブづくりを行いながらサッカーの普及、振興に努めなければならない」と記されています。

昨年度、55のJクラブが年間で行ったホームタウン活動は20,000回を超え、1クラブに換算すると約360回。各クラブの選手や監督、マスコット、スタッフがほぼ毎日、教育、健康増進、まちづくりなどをテーマに、地域の状況に応じたホームタウン活動を行っています。

## 主語を変える

そして27年目を迎えたJリーグは次の展開として、地域との連携を深め、地域の笑顔を増やすために、共に未来を創る活動として社会連携（通称：シャレン！）のプラットフォームづくりを進めています。Jリーグ・クラブが地域社会のために「できることをする」だけでなく、地域の人々が主語となり、「Jリーグをつかおう。社会のために。」と言っていただけのような存在になる、という主語の転換です。

2019年5月15日のJリーグの日には、「シャレン！」の活動に共感する企業、行政、NPOなどが参加して、ネットワークミーティングが開催されました。各地でもシャレン！の輪が広がっています。

## 持続可能な地域の発展のために

地域は今、人口減少、高齢化社会、教育格差、環境問題など、多くの課題を抱えています。また、地球規模の危機的状況に対し、政府、自治体、企業、NPO、市民が「SDGs」を共通言語として多層的に協働しています。

スポーツの「する」「みる」「ささえる」というこれまでの関わり方に加え、「スポーツを使う」という視点を加えることで、サッカー/スポーツの「つなげる力」や「熱量を高める力」を、より良い地域社会づくりに活かすことができるのではないのでしょうか？

Y.S.C.C.横浜は、「地域はファミリー」というクラブ理念のもと33年間SDGsのすべてのゴールにつながる地道な活動を続けてきた。（Jリーグの事例紹介映像から）



2019年5月15日のJリーグの日には、「シャレン！」の活動に共感する企業、行政、NPOなどが参加して、ネットワークミーティングを開催。各地でもシャレン！の輪が広がっている。

川崎フロンターレでは、川崎市が主催する「えがお共創プロジェクト」において発達障害の子どもたちに旅行とスタジアム観戦を体験してもらおう試みを行うなど、シャレン！ Facebookページで随時各クラブの情報を発信している。



# CSRリレーコラム第4回「『社会貢献活動』を伝えること」 ～社会貢献委員会 赤羽委員～





# CSRリレーコラム第4回「『社会貢献活動』を伝えること」 ～社会貢献委員会 赤羽委員～

## JFAと「社会貢献活動」

JFAは公益財団法人という法人格をもち、その理念に「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する」ということを掲げています。つまり、JFAによるサッカーを通じた社会貢献活動は、自らの理念と存在意義を具現化する大切なものです。

JFAの社会貢献活動は、国連の持続可能な開発目標（SDGs）に沿って主に3つの柱に沿っています。1つ目は「多様性を大切にすること」ということで、サッカーは、年齢・性別・人種・国籍・障がいの有無などに関係なく、だれもが、いつでも、どこでも楽しむことができるという、みんなのスポーツであることを広めるものです。例えば、障がい者サッカーや女子サッカーの普及・啓発や、シニア世代向け競技会の開催などです。2つ目は、「次世代の若者を育てる」ということで、キッズプログラムや選手育成をはじめ、国際交流やアジア貢献などを行っています。3つ目は、「住みやすいまちづくりにつなげる」ということです。例えば、「JFAグリーンプロジェクト」は子ども達の外遊びを促し、コミュニティの中心的な場になるように芝生のグラウンドを増やそうというものです。また、子どもの貧困を減らそうという働きかけとして、JFAの事務所がある東京都文京区において「子ども宅食プロジェクト」へ協力し、貧困家庭への支援も行っています。

また、サッカーを通じた社会貢献は、国際サッカー連盟（FIFA）やアジアサッカー連盟（AFC）などでも注力しています。多様性を大切にすることや、グラスルーツの支援や普及などが大きな柱となっており、だれでも、どこでも、楽しくサッカーをすることで得られる自己尊重感を多くの人に持ってほしいという信念があります。

## 「発信する」ことの大切さ

このように、JFAやFIFAではさまざまな社会貢献活動を展開していますが、「実施する」と同様に大事なことがあります。それは「発信する」ということです。よく「社会貢献活動は、語らずに粛々とやっていくべきもの」と思われがちですが、そうではありません。あえて活動を発信することで、そこに社会課題があり、それに困っている人々がいる、ということを知ってもらう、ということも大きな貢献となります。日本では「隠匿の美」といわれるように、自ら発信することは好しとしない向きもありますが、発信していくことは、さまざまな評価が得られる機会となり、さらなる成長につながる重要なステップとなるものです。

## ステークホルダーの意見を大切に

また、ステークホルダー（利害関係者）の意見を聴く、ということも、社会貢献活動にとっては大切なことです。社会貢献活動はいわゆる「善いこと」であるがゆえに自己満足に陥りやすいものでもあります。そうならないために、ステークホルダーの意見を聴くことで、何を求められているのかを把握して、応えていくことが重要です。JFAでも、「グラスルーツ・アンケート調査」などのそれぞれの活動に関わる方々へのアンケートや、JFA公式ウェブサイトイベントへ参加したサッカーファミリーの声をこまめにご紹介することによって、自らの方向性を確認し、みなさまの声を組織の成長に活かせるように努めています。



JFAは女子サッカーの普及を目的とした「JFAなでしこひろば」をはじめ、様々な社会の発展に貢献する活動を行っている。



JFAこころのプロジェクト「夢の教室」で授業をするプロフェッショナルレフェリーの佐藤隆治さん。JFAの様々な活動は、参加者、スタッフ、観戦者の声とともにJFA公式ウェブサイトへ掲載し、積極的に情報発信している。



# CSRリレーコラム第5回「誕生日寄付」からみる寄付の醍醐味」 ～社会貢献委員会 高橋委員～



写真提供：公益社団法人日本フィランソロビー協会

# CSRリレーコラム第5回「誕生日寄付」からみる寄付の醍醐味」

## ～社会貢献委員会 高橋委員～

### 寄付は、お金に信頼を載せて回す経済活動

公益社団法人日本フィランソピー協会は、個人の社会参加・社会貢献が健全な民主主義社会の原点である、という考えの下、企業のステークホルダーである従業員や顧客などの個人のボランティアや寄付の推進をしています。

「寄付は、あげて終わり」というように言われがちですが、貧困・自然保護・アートなどを支援する団体等に寄付すれば、彼らは貯め込まないで即刻消費し、経済の循環が生まれます。すると経済は元気になります。寄付は、信頼をお金に乗せて循環させる経済活動なのです。

そこで、一般の人の寄付のプラットフォームを作ろうと、「誕生日寄付」を始めました。

誕生日にお祝いをもらうのではなく寄付をする？

「自分の誕生日に、いのちを与えられたことに感謝して寄付をしよう」「寄付先は、いのちをつなぐ次世代の若者に」という事業です。実は、「誕生日寄付」のヒントをくださったのは、Jリーグ初代チェアマンでJFA相談役の川淵三郎さんです。川淵さんは、25年以上もご自分の誕生日にプレゼントをもらうのではなく、寄付をしておられるのです。寄付先に選んださわやか福祉財団の当時の理事長、現会長の堀田力さんに、「いくらぐらい寄付したらいいでしょう？」と相談したそうです。普通は、「無理のない金額を」と言いそうですが、堀田さんの答えは「ちょっと痛い金額がいいですね」。川淵さんもこの言葉に痺れたそうです。私は、この言葉にかっこいい大人の匂いを感じました。人によっても人生のステージによっても痛い金額は変わります。その時々「ちょっと痛い金額」を若者の応援に。「これこそ、かっこいい大人だ！」

このお話を伺い、是非、これを拡げていきたいと思い、川淵さんにも賛同人になっていただきました。

### 寄付は未来への投資、リターンは金銭以上

支援する対象は、今、困難を抱えている若者です。彼らに寄り添い支えることで、彼らの未来に希望の灯をともしたいと思います。そして、次は、彼らが社会や次の世代のために貢献してくれたら、と願っています。寄付は長期投資に似ています。どちらも、未来に夢を託して資金を投入します。寄付のリターンは支援する子どもたちの成長と、それを共有する喜びや感動です。寄付をしてくださった方からの声をご紹介します。

「誕生日寄付に登録した時には、元気だったのですが、その後、病気が発覚し、今、闘病中です。そして、誕生日がやってきました。うーん、それどころじゃないか、と一瞬思ったのですが、どっこい、今、生きているのだから少額でも寄付しよう、と思い直しました。この寄付を長く続けられる自分でありたいという、願いも込めました。」

「今、とてもつらい思いをしているかもしれないあなた、誰かが必ず見ている、手を差し伸べています。あきらめないで。私も応援しています。」

### 誕生日に新しいつながりをつくらう

先日、ロンドン在住の方に、素敵な「誕生日寄付」の話を聞きました。ロンドンにある、スープキッチン（貧困層の人に無料で食事を提供する施設）でボランティアをしている人の話です。ある日、キッチンに入っていき、チキンのシチューの仕込み中。料理をしている人が、「××さんが、今日は私の誕生日なので、と言ってチキンを寄付してくださったのよ」。こんな素敵なエピソードが、町のあちこちで生まれることを願い、各地の「かっこいい大人」を紹介しながら、「誕生日寄付」仲間を増やしていきたいと思っています。

いのちを思い、人を想う心を寄付に乗せて

Thanks Birthday ! & Happy Donation !







**Thank you.**